

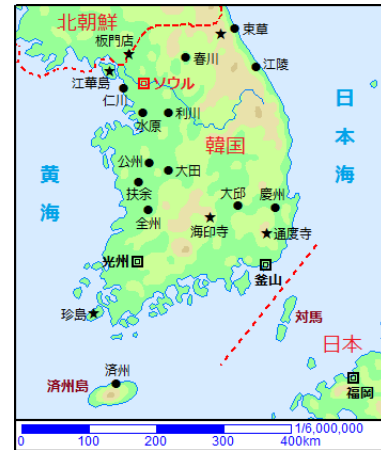
路線バスで巡る韓国東海岸の温泉と蕎麦

2019年8月14日

江戸ソバリエ会員 天野栄三

日韓の政治関係が軋んでいて日に日に悪くなっていることに胸を痛めながら夏休みの8月9日韓国に向けて出発する。

韓国の首都ソウルでは慰安婦問題、徴用工問題等で連日、NO 日本、NO ABE のデモが繰り出されて、日本でも毎日のニュースで流されている。路上で日の丸が燃やされる映像まで流れている。ワイドショーでも連日放送されている。これほどの険悪ムードは過去にはなかった。こんな状況の中での出発だ、今回の訪韓は12月に計画し楽しみにしていた。40年来の国を超えての親友との旅行だ、友人は80歳になったので彼の体調の良いときに行っておきたい。40年前、彼は東大に官費で研修に来ておりアルバイト先の韓国文化院の入門韓国語講座の講師をしていた。私はその受講生だった。以来こんなに長い付き合いになるとは当時思ってもみなかったがお互いに気が合ったのだろう。



今回は“路線バスで巡る韓国東海岸の温泉と蕎麦”をテーマにした。がその後タイトルを“路線バス巡る韓国東海岸弥次喜多道中”にしなければならない旅になるとは。韓国は日本ほど鉄道網が発達していない。特に経済の発展が遅れた東海岸には鉄道が少ないので移動手段はバスが中心になる。



金曜日に日本橋の会社を定時の5時に出て箱崎バスターミナルの3階のカウンターで5時20分発のバスに乗り18時30分には、成田空港第三ターミナルに到着した。リムジンバスは東京から行くと最初のターミナルがLCC専用の第三ターミナルだ。

韓国LCC航空会社の一つチェジュ航空で韓国大邱空港まで約2時間の空の旅だが、LCCが就航してから韓国第三の都市大邱へはとっとも近くなった。

大邱市は韓国の中央部より少し釜山に近い場所で、韓国第三の都市。リンゴの産地と繊維産業の町で有名だ。しかし韓国も温暖化の影響でリンゴ畑が北側に移りつつあるようだ。世界のサムソンもこの町で再起した。プロ野球のサムソンライオンズの本拠地でもある。人口は250万人の都市だ。



早速、最初の試練が始まった。夜10時に大邱国際空港に到着して税関を出てロビーに出てwonに両替しておこうと思ったがBANKのシャッターが閉まっており韓国wonに両替できなかった。最近では、大きな支払いはカードで払うので小銭だけで済ましている。韓国は日本よりクレジットカードやICでの支払いが進んでいる。コンビニの数百wonの買い物でもカードで払っている。私は韓国専用の財布を前回きれいに使い切ってしまったのをうっかりしていた。

タクシーに乗る前に日本円で支払うことを運転手に交渉する。ドライバーは快く承諾してくれたのでタクシーに乗った。ホテルまでは約 20 分、韓国のタクシー料金は 2 km で 3,000won 日本の 3 割弱で本当に安いと思う。ホテルに到着すると料金メーターが 8,500won だったので日本円で 1,000 円渡しておつりはチップとして渡した。今日の為替レートは約 11 分の 1 で約 100 円が 1,100won になる。寿城区にあるホテルの部屋に入りすぐテレビをつける。首都ソウルは今も、大きなデモが続いているようだ。



翌朝友人がホテルに来て朝食を一緒にすませる、東大邱バスターミナルに着き、“三陟”（サンチョク）行のバスに乗る。

シートは 3 列の長距離用バスだ。4 時間のバス旅行が始まった。古都慶州（キョンジュ）を通り、鉄鋼の町、浦項（ポハン）を過ぎると海岸線に出る 7 号線を北上する。途中 1 回の休憩があり昼頃に三陟総合バスターミナルに到着した。三陟市は海底が隆起した町で石灰などの鉱物が産出され市の中心部に大きなセメント工場がある。大型ダンプカーが車列を組んで鉱石を運んでいるのが目につく。



大邱市内のホテル予約は日本からネットで簡単に安くとれるが、地方都市のホテルや旅館は日本からは予約が取りにくい。バスターミナル近くの中華料理店で《じゃーじゃ麺》を食べた。韓国の《じゃーじゃ麺》はイカ墨スパゲッティのような真っ黒だが味は日本と大差ない。そろそろチェックインできる頃なので、予約しておいた三陟観光温泉ホテルにタクシーで向かう。ドライバーによると市内では結婚式もできる大型ホテルということだ。このタクシーに合計 6 回も乗車するとは思わなかった。チェックインしてカギを受け取り大浴場を聞くとフロントの女性は、大浴場はないという。では敷地内で見えたサウナはと聞くと現在は営業を休んでいるそうである。そして、部屋にもバスタブはなくシャワーのみだそうだ。二人で顔を見合わせて笑うしかなかった。部屋で休憩の後、先ほどのタクシードライバーを携帯電話で呼び出して以前に聞いていたマックス店に行くことにした。



「プイルマックス」三陟市セジョンニョンドロ 596 番地（カルジョン洞）

店は庭も広くて立派な店舗だ。開店時間まで 40 分くらいあったので庭に 2 つある東屋に靴を脱いで上がり開店を待つことにした。緑が多い中で蚊もいなくて通りぬける風が気持ちいい。しばらくすると店の入り口に客が並び始めたので一緒にならぶと番号札を渡された。大きな靴入れは銭湯のようだ。厨房をはさんで左右に 10 卓ずつ合計 20 卓、席数は 100 席ぐらいか、アジュマ（中年女性）がメニューをもってオーダーを取りに来た。番号札を渡しながら多くの客は、メニューを見ないでオーダーする。目当ての食事はすでに決まっている様子だ。売れ筋は《ビピンマックス》のようだが、私は辛いのがにがてなので《ムルマックス》をオーダーした。友人は《ビピンマックス》をあたりまえのように頼む。やがて、料理が運ばれてきたが番号札どおりに来るのには感心した。《マックス》の麺は蕎麦粉 100% だがこの店はやや白い。蕎麦粉は地元平昌産とのことでスープも澄んでいて、丁寧なスープ作りが好評のようだ。



厨房は広く清潔である。満足して店を出る。近くには数軒の《マックス》の店があるがいずれもしゃれた感じがする。タクシーに迎えに来てもらいホテルへもどる。翌朝9時に迎えを頼んだ。

三陟市の歴史遺産で楼閣が有名な歴史的観光地へ向かう 竹西楼(チュッソル)は市内を流れる五十川を見下ろす断崖に立っておりすばらしい眺望である。自然との一体感



を重視した建築様式が特徴で眼下に博物館もある。柱と屋根だけの楼閣だが欄間には多くの書が架けてあった。ペ・ヨンジュ主演の映画「四月の雪」の撮影地としても有名だそうである。見学中ドライバーが来て写真を撮ってくれた。

タクシーで三陟総合バスターミナルへ向かう。市内にはかつて炭鉱もあったそうだ。バスターミナルのチケット売り場には子犬が座っていて日本の“たま駅長”のようだ。

10分ほどで三陟市行きがあったので13番乗り場でバスに乗る。座席は半分ほど埋まっていた。江陵まではルート7号線で海岸沿いを走る。2時間で到着の予定だ。1時間ほどで東海市(トンネシ)を通過したが、この海岸に1996年に北朝鮮の潜水艦が26名の乗組員を乗せてきて座礁した。乗組員はここに上陸して市内で韓国軍と戦闘状態になり1名は投降し25名は射殺及び自殺したが、友人の長男が徴兵で海軍医官として全員の検視を行ったという。今でもこの海岸に潜水艦が展示されている。

ほどなくバスは江陵バスターミナルへ到着。ターミナルで昼食をとることにして食堂へ入ると途中の東海市のバス停から乗った乗客に日本人女性がいた。20代後半ぐらいかなと想像していたら彼女から声がかかった。この食堂で《プルコギ定食》を食べたいが2人前以上からと読めるが大丈夫かと聞いてきたので店員に聞くと一人でもOKとのことで彼女はそれを注文した。私たちはまた《マックス》にした。彼女は島根県の境港から東海市までのフェリーで先ほど入国したそうだ、(イースタンフェリーが境港から韓国の東海市経由でロシアのウラジオストックまで週1便運航している。運賃は堺市と東海市間は片道2等で11,000円)そして江陵市内を観光してから列車でソウルに向かうという。“地球の歩き方”を持っていた。楽しい旅行になることを祈る。



さて、江陵のこの食堂の《マックス》は色が黒くて標準色といったところなのだが、釜の上に押し出し機が見当たらないので半乾麺だろうということになった。

江陵市は2018年冬季オリンピックのメディアセンターになった人口21万人の江原道の中核市である。

市内で訪ねたい場所に“烏竹軒”(オジュコン)がある。韓国の最高額紙幣5万ウォン札に描かれている朝鮮時代の女流画家 申師任堂(シン・サイムダン)の暮らした家が保存され博物館になっているので行ってみる。数年前に“自由な魂を持った朝鮮時代の女性サイムダン”を映画化し



て日本でも放映された。主役はチャングムの誓いのイ・ヨンエの13年ぶりの主演映画だ。

今夜の宿泊地に向かう途中にあるので、バスターミナルから市内バスで向かう、バス停から200メートルぐらいで入り口になるが周辺はカフェ銀座のようで10軒以上のカフェが軒を連ねていた。それぞれの店にパーキングあって建物もなかなかモダンである。韓国は少し前に団塊の世代の定年組を狙ってカフェの独立指南塾ブームがあってカフェは



雨後の竹の子状態である。友人はそのうちの1軒に入りたがっていたが天気が悪かった

ので急いで博物館「烏竹軒」（オジュコン）に入る。入場料は韓国人60歳以上は無料、外国人は3000wonで韓国人歴史的遺産の韓屋（ハノック韓国の古民家）は良く整備されていた。再び市内バスに乗って今夜のホテル鏡浦台ビーチホテルに向かう。丘の上の楼閣からは有名な湖「鏡浦湖（キョンポ



ホ）」、奥に広がる海まで一望でき、夜になれば月が5つ見えると言われている。「夜空に浮かぶ月」「湖に映る月」「海に浮かぶ月」「お酒の盃に映る月」そして「君の瞳に映る月」と、美しい夜空と月の名所であることから、日本でも人気のJINRO焼酎「鏡月」（キョンウォル）はこれ

にちなんで名前を付けたという。この時期、海水浴客以外はこのホテルには来ないホテルのようだ。チェックインすると部屋料金はハイシーズン料金でまたまたバスタブも大浴場もなかった。海岸を散策して海鮮料理店で夕食を頼むが《マックス》はなくて刺身定食で済ませることにした。翌日は路線バスで江陵駅に向かう。ここから三陟海岸駅までのパダヨルチャ（海の列車）に乗ることにした。韓国鉄道公社が海岸線の美しい線路を走る観光列車を作って売り出したもので座席はすべて海側を向いており、カフェ売店のついた3両編成でおしゃれな列車である。1時間ほどで三陟海岸駅に到着し再び三陟バスターミナルへ向かう。今日は以前から行って見たかった念願の白岩（ペクガン）温泉郷だ。田舎の路線バスに乗る。慶山北道 蔚珍郡 温泉面 温井里（キョンサンブクド・ウルジングン・オンチョンミョン・オンジョンニ）温泉街に到着した。ここには大型ホテルが数軒あるが私たちは予約していた白岩観光温泉ホテルにチェックインした。このホテルは全て大部屋で、日本でいう湯治宿のようだ。大浴場は古めかしいが湯量が豊富でかけ流しが気持ちよい。アルカリラジウム温泉で無色透明、湧出温度は53度、韓国では最高泉質として有名だ。バス停のロータリー付近にはコンビニと韓国料理店が営業していた。というよりこの2件しかなかった。夕食は店主お勧め《コムタン》に決まった。味は申し分ない。《コムタン》は、牛のスネ、胸肉を内蔵と骨を煮てだしを取ったスープで辛くない。これにご飯をキムチで食べる。帰り際に明朝の开店時間を聞くと7時からだという。部屋にもどってエアコンを強冷にして、大浴場へ行く。のんびりつかるだけだ。湯温は39度で長湯ができる。透明度が高いがしっとりしている。部屋のテレビをつけるが友人はニュース番組でないところを見る。・・・そしてテレビをつけっぱなしで寝てしまった。大浴場で前二

日の温泉名しのみだと言って笑いこげるが他に客はいない。付近を散策していると白い花の咲く蕎麦畑を見つけた。江原道は韓国産蕎麦の産地らしくいたるところに畑がある。すると友人が大邱に《メミルムク》の店が1軒残っていると出た。《メミルムク》は100%蕎麦粉と水だけで作り、包丁で切って器に入れてスープをかけて仕上がりだという。これは凄いニュースだ、すぐ見に行きたくなったので急いで大邱に戻ることにした。昨夜の食堂に行くのと直ぐにできる料理は《コムタン》という。また《コムタン》を食べて始発バスに乗り三陟バスターミナルへ向かった。タイミングよく大邱行きの急行バスがあった。7号線には高速道路が建設途中なので大邱到着は昼頃になるだろう。

《メミルムク》を出す店は大邱市の中心部より地下鉄で20分ぐらいの新明（シンミョン）駅からタクシーで向かう。地元のハイカーでにぎわう“アン山”（標高471m）



の登山道の登り口にある。ハルメモッチブ（おばあさんの麺



や）という名前の店で客席は10卓ぐらい。店の住所は大邱広域市寿城区（スソング）オクスキル56-1である。店内の通りに面したところに大きな鍋があり、これで《メミルムク》を煮込むのを客に見せている。店主は3代目のペ・ソンシク社長。家族と従業員2人の5人で運営している。昼時は過ぎていたが半分ほどの席が埋まっている。なかなか繁盛しているようだメニューを見ると《メミルムク》が10種類以上並んでいる。注文した《メミルムク》がテーブルに運ばれてきた。先ず写真に撮ってから食べてみる。確かにまな板の上で包丁で手早く切った感がある。出汁はイリコ味である

ムクの上には白菜キムチが乗りその上に刻みのりと白胡麻がかけられている。ムクは箸でつかむと切れてしまうので優しくつかんで食べる。初めての感覚だ。食べた後、店主に話を聞く、友人は遠慮がちに、通訳を始める。江戸ソバリエの名刺を出して東京で蕎麦の栽培をしていると自己紹介をする。そしてハングル版の「そばの食べ方」のプリントを渡すと興味深そうにじっと見て家族にも見せ始めた。すると大学生のお嬢さんが先週大阪へ遊びに行き昨日帰ってきたばかりだと語り始めた。お嬢さんもプリントを見ながらいろいろ話をしている。



《メミルムク》に使う蕎麦粉は中国産だという韓国産は価格の問題と量が安定しないという。製造方法を聞くが、いろいろ質問すると実際に作ってくれるという。すでに、蕎麦粉は大鍋の水に溶かしてあった大鍋のガスに火をつけた。初老の男性従業員が大きな木製しゃもじで焦がさないようにずっとかき回し続ける。熱が加わって沸騰すると次第に粘度が出てきた。40分ほどで加熱は終わるがしゃもじが垂直に立つほど固まっている。粗熱が取れたらバットに移しさらに冷めたら冷蔵庫で冷やすという。



今は《メミルムク》を専門に出す店は韓国でも珍しいという。1940年頃に朝鮮半島全体で流行した食べ物だという。現在でも田舎出身の家庭では子供のおやつに《メミルムク》を食べるといふ。サラダの具に使うとかいろいろな料理に使えるそうだ。今はやりのダ



イエット用に再び見直されれば良いのだがと店主は語る。気が付くと3時を過ぎていた。

お礼を言って外へ出ると店主が自動車で駅まで送ると言い外に出てきた。好意に甘えることにした。車中、東京に来たらずひ

連絡をくれるようお願いして別れた。蕎麦の縁で知人がまた一人増えた。

この頃大邱市内でも”SOBA”の看板が良く目につくようになってきた。看板の店に入る。内容はざるそば風冷麺（メミルネンミョン）であるが、それでもうれしさがわいてくる。

夕食まで少し時間があるのでホテルで小休憩をとる。今夜は友人の家族との夕食会だ。奥さんと産婦人科医に嫁いだ長女の4人で韓国料理店に向かう。長女は独身時代に3か月ほど日本語の勉強のために我が家で一緒に生活したので懐かしさがわくが、時の経つのは早いもう孫ができるという。いろいろな話で盛り上がった。給仕が閉店したいと言ってきた。時計を見ると10時になっていた。別れは惜しいがしかたない。次に会うまでお互いの健康を祈念しながらホテルへ送ってもらった。長女は毎日運転しているそうでなかなか上手だ。

明日はチェジュ航空で6時発成田行きに乗るのでタクシーを4時に頼んで休む。早朝の市内は道がすいていて空港へは10分で到着した。大邱空港と市内は近いが鉄道の空港線はないのですべてバスかタクシーだ。

定刻通り離陸し午前8時ジャストに成田空港に到着した。第三ターミナルのフードコートで朝食を食べ調布行のリムジンバスに乗り、家内に無事成田に着いたとメールをして今回の旅行は無事終了した。友人との付き合いは家族ぐるみでこれからも変わることはないだろう。ソウルではまだデモが激しく行われているが今回訪問した大邱市、江原道ではデモやポスターがなかったのは幸いであった。

また、日本では反韓のデモ見られない。韓国の人が戦後、新国家建設に向かう中で戦前の記憶を心の奥に封印した人がいることを忘れてはいけないと思う。 La FIN

